

5月4日（日）マルコの福音書1章15節

「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」

時とは、神様がみこころによって定められた時であり、特にそれがイエスによる救いを通して成し遂げられることを指していて、神の国とは、地上のさまざまな国のようなものではなく、神の聖さと正義、また神の愛とあわれみと恵みによる支配を指しています。イエスキリストによる救いを通しての罪、死、この世の支配者であるサタンの支配からの解放により、人々が新たに神の支配へ移されることで、そこに私たちは神の支配としての神の国の前進を見ることができ、神の国は近づいたと言えるのです。ですから、イエスキリストの到来により神の国は確かに訪れましたが、まだ神の支配が完全に及んでいるわけではありません。ですから、イエスキリストの再臨を通して、すべての罪や悪が滅ぼされ、完全な神の支配が来る時を私たちは信仰をもって待ち望まなければならないのです。

このようなかたちで神の国が到来したことにより人々に求められているのは、悔い改めて福音を信じるということです。そうするなら、誰であっても、イエスキリストの福音としての救いにあずかることができ、この世にあっても神の支配の中を生きることができるからです。バプテスマのヨハネ、イエス様ご自身と神の国の福音が宣言されて以来、ここまで神の国の福音が宣べ伝えられ続けてまいりました。そして私たちも悔い改めて福音を信じたことで、確かに神の支配の中に入れられ、そしてこの世にありながらも、私たちは神の支配の中をともに生きています。そしてイエス様が来られるその時まで、変ることなくこの福音は宣べ伝え続けられることでしょう。そして、私たち一人一人もこの地上にある限り、神の国の福音を宣べ伝え続け、また教会も神の国の福音を伝え続ける教会でありたいと思わされます。

5月5日（月）マルコの福音書1章16, 17節

「わたしについて来なさい。人間を取る漁師にしてあげよう。」

ガリラヤは、ヨシュアの時代にナフタリ族の相続地でした。（ヨシュア記19：32～39）王国の分裂後は、北イスラエル王国に属し、紀元前722年にアッシリヤにより北イスラエル王国が滅ぼされると、その後バビロン、ペルシャ、マケドニアの支配を受けることとなりました。イザヤ書9章1節の「異邦人のガリラヤ」との表現は、まさにその異邦人による統治を表現していると思われます。そのことによりガリラヤ人は混血民族となり、民族的純血を重んじるユダヤ人たちからは軽蔑され、またユダヤ人指導者はガリラヤを辺境の地とみなして、ガリラヤからは預言者が起らないと考えていました。（ヨハネの福音書7：52）イエス様は、まさにこのようなガリラヤの地にあるガリラヤ湖のほとりを通られ、シモンとシモンの兄弟アンデレが、湖で網を打っているのをご覧になりました。そして、彼らに「わたしについて来なさい。人間を取る漁師にしてあげよう」と言ったのです。昨日も書きましたようにイエス様の到来によりいよいよ神の国の福音が宣教される時代がまいりましたが、その時にイエス様はみこころによりご自分が召した者たちを用いようとされました。今もイエス様は、みこころによって御国の福音を宣教する者を召しておられます。召しに応答する者たちがさらに起こされるように祈りましょう。

次に、「わたしについて来なさい。人間を取る漁師にしてあげよう」とイエス様は言われましたが、シモンとアンデレにとってはイエス様に従うことは決して当然のことではありませんでした。そこには信仰が求められたのです。シモンとアンデレが生活の糧である網を捨てて従ったように、今でもすべてを捨ててイエス様について行くことは決して容易なことではなく、信仰が求められます。しかし私たちは召されるイエス様がどなたなのか知っていて、そのお方が「わたしについて来なさい。」と言われているので、イエス様を信じる信仰をもって呼ばれたなら、すぐに応答する者でありたいと思わされます。

5月6日（火）マルコの福音書1章18～20節

「すると、彼らはすぐに網を捨てて、イエスに従った。」（18節）

イエス様は漁師であるシモンとアンデレ、ヤコブとヨハネをご自分の弟子とするためにお呼びになりました。ここでイエス様は、「わたしについて来なさい。」とご自分の権威によって彼らに無条件の召しを与えておられます。最初に弟子となった、これらの四人は、バプテスマのヨハネの活動を通して、イエスキリストのことをすでに知っていたのでしょう。少なくともシモンとアンデレは、バプテスマのヨハネの紹介でイエス様のことを知っていました。（ヨハネ1：40、41）その中で、イエス様は彼らに「わたしについて来なさい。」との召しに対する即座で、妥協のない服従を要求しました。しばしば弟子訓練ということが言われますが、何かの方法論を学ぶよりも、聖書の語る弟子の姿は服従です。イエス様について来なさいと言われれば、すべてを捨てて従う姿こそが弟子の姿であることをあらためて思わされます。

そしてイエス様は「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。」と言われました。人間を取る漁師にしていただくことがイエス様の弟子とされる者に与えられている約束です。イエス様の弟子は、自力で何かめざましい働きをするのではありませんし、それはできません。むしろイエス様によって弟子である私たちが、人間をとる漁師にさせていただくために、イエス様の助けをいただきながら、働きをさせていただき、さらにその中であってイエス様の働きをするのにふさわしい者へと整えられていくのです。そのようにしてイエス様の弟子は決して自分自身を誇ることなく、謙遜にさせられ、そしてすべての栄光を神様に帰して、神様をほめたたえながら歩いていくのです。それがイエス様の弟子としての訓練であり、歩みです。

16節で「彼らは漁師であった」とあります。そんなことは誰でも分かることであり、なぜあえてそのようなことを書くのかと思われそうです。しかし、マルコからしますと、これは大きな驚きだったのではと思います。つまり、人を何かの働きに召そうとする時には、職業や知識や学歴などを重視するでしょう。もちろん漁師が悪いというわけではありませんが、前回も書きましたが、人々が蔑むガリラヤ出身の漁師たちをイエス様はご自分の働きに用いようとされたのです。イエス様の働きを考えれば、自分のような者がとってしまいやすいですが、主は取るに足らない者を用いることをみこころとしていることをあらためて私たちは知らされるのです。

5月7日（水）マルコの福音書1章21～28節

「それは、イエスが、律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように教えられたからである。」（22節）

カペナウムの会堂で安息日にイエス様が教えられると、聞いた者はその教えに驚きました。すなわちイエスの教えに圧倒されたのです。なぜなら、今まで自分たちが聞いた教えとはまるで違っていたからです。今まで彼らが聞いていた教えは、律法学者からの教えでした。彼らは昔からの伝承を引用しては果てしない議論を続けていました。つまり彼らは、そのようなものを引用することで、自分たちの議論を権威づけしようとしたのです。彼らの権威は、結局単に人から来た権威でした。しかしイエス様の権威は、神ご自身から来た権威です。イエス様は、しばしば「わたしはあなたがたに言います。」という言い方をされました。まさに、神の御子であるイエス様ご自身の権威をもって語られたのです。そして、今は聖書が神の権威をもって私たちに語りかけてきます。そこには人の考えや意見、人の権威などが入り込んでくる余地はありません。聖書を通して、神自らが権威をもって語っているのです。

23節を見ますと、汚れた霊につかれた人がその会堂にいました。コールという学者は、汚れた霊につかれた人が会堂にいて、その人がその苦しみから解放されることを望まなかったところにカペナウムの会堂の霊的状态が現れていると言いましたが、もしかすると汚れた霊につかれていた人も会堂にいた人もどうしていいのかわからなかったのかもしれないし、そこに霊の働きに対する人の無力さが現れているとも言えます。24節のイエス様に対する汚れた霊の言葉から、汚れた霊はイエス様のことをよく知っていたことがわかります。特にイエス様の持っている権威を知り恐れたのです。汚れた霊が「滅ぼしに来たのですか」と言っていますように、イエス様は簡単にそのような悪しき霊を滅ぼすことのできる力と権威を持っておられます。そして、その権威を用いて、汚れた霊をその人から追い出されました。イエス様は、今も変わることなくその権威と力を用いてみわざをなさっています。ですから、私たちはイエス様のみわざに頼ることができるのです。しかし、このイエス様のみわざは会堂にいる人たちを驚かせただけで信仰に結びつくことはありませんでした。私たちは、さまざまなかたちで主のみわざを経験しているにもかかわらず、それが単なる出来事で終わってしまって、信仰に結びつかないことがあります。一つ一つの主のみわざを見させていただくことが私たちの信仰を強めることになるように祈りましょう。

5月8日（木）マルコの福音書1章29～34節

「イエスは、様々な病気にかかっている多くの人をいやされた。また多くの悪霊を追い出し、悪霊どもがものを言うのをお許しにならなかった。彼らがイエスのことを知っていたからである。」（34節）

ここにはイエス様のいやしの記事が出てまいります。まずイエス様は、ペテロのしゅうとめの熱病をいやされました。私たちは、この短い記事の中から大切なことを教えられます。イエス様はペテロのしゅうとめをいやされました。そしていやされて熱がひいた後、「彼女は人々をもてなしました。」（31節）熱病がいやされて元気になったからだろうと単純には考えられないだろうと私は思います。特に「もてなした」ということばの上に、*がついていますので欄外注を見ますと、「に仕えた」とあります。つまり自分の熱病がいやされたことの感謝をイエス様や他の人々に仕えるというかたちで現したのです。私達もイエス様によって罪を赦され、その罪から出てくる心の中にあった絶望、ねたみ、怒り、憎しみなどからもイエス様は解放してくださったのです。そのイエス様に対して、私達も何かのかたちで感謝を現すべきであり、それがイエス様や他の人々に仕えるというかたちで現されたなら、すばらしい応答となっていくことでしょう。

さらにイエス様は「様々な病気にかかっている多くの人をいやされた。また、多くの悪霊を追い出し」とあります。この地上は、病と悪霊の働きに満ちています。しかしそのよう中で、救い主としてこの地上に来られたイエス様は、病をいやし、悪霊を追い出され、悪霊どもがものを言うことすらお許しにならなかったことでご自分の力と権威をお示しになりました。イエス様は確かに神の御子です。そして、その示された力と権威をもって今もすべてのものを治めておられます。だからこそ私達はその力強いイエス様にお頼りすることができるのです。このイエス様がともにいてくださることを信じることにより、私達は恐れるものは何もありません。

5月9日（金）マルコの福音書1章35～39節

「さて、イエスは朝早く、まだ暗いうちに起きて寂しいところに出かけて行き、そこで祈っておられた。」（35節）

イエス様は、「朝早くまだ暗いうちに」起きて、「寂しい所へ出て行き」祈られました。このようにイエス様が、朝の早い時間帯を選ばれ、寂しいところという場所を選ばれたのは、イエス様が一人となって、誰にも邪魔されないで、またさまざま世の中の動きに煩わされないで祈るためだったのです。他の兄弟姉妹と祈祷会やスモールグループ等で、課題を出し合っただけで、心に合わせて祈ることは幸いなことですが、一人で静かに神様と祈りによって個人的に語ることもまた幸いなことです。私たちも、イエス様のように神様と個人的な深い交わりを持つことのできる者でありたいと願われます。朝岡勝師も、「・・・祈りの本質が三位一体の神との豊かな語りであり、交わりであるという事実です。祈りは単なる意思伝達や連絡、報告、情報交換の手段ではなく、「愛の交わり」の具体的な姿です。御父と御子の祈りは、天と地との間の定期報告会のようなものではなく、まさに御父と御子の間の交わり、愛の語りだったでしょう。」と著書の中に記しています。（「三位一体の神と語る祈りの作法」2024年参照）いかがでしょうか。私たちの祈りは、単なる報告、独り言のようになってしまっていないでしょうか。まさに御父との豊かな交わり、御父の私たちへの愛と私たちの御父への愛を通しての豊かな交わりとなっていますか。

イエス様は、そのようにして祈りを大切にしながら、地上で生活なさったのです。そうであれば、私たちにも祈りが必要なはずですが、祈りは呼吸に例えられます。呼吸をしなければ生きられないように、祈らないで健全な信仰生活を送ることはできません。もし祈らなくても、自分は信仰生活を送ることができていると思っている人があれば、その人は傲慢な幻想をいだいて、霊的に死んでいるのに生きていると錯覚している人と言うことができるでしょう。私たちもそうならないようにしたいものです。

5月10日(土) マルコの福音書1章35～39節

「イエスは彼らに言われた。「さあ、近くにある別の町や村へ行こう。わたしはそこでも福音を伝えよう。そのために、わたしは出て来たのだから。」

アラン・コール氏は、34節の様々な病気にかかっている多くの人を癒すことや多くの悪霊を追い出すことは時間がかかり、実際に聖書には書かれていないが、イエスにとって力を使い果たすような経験であっただろうし、それもまたイエスが人を離れて、朝早く暗いうちに起きて、寂しいところに出かけて行き、そこで祈っておられたもう一つの理由であったかもしれないと言います。牧師である私自身も忙しい時には、まず休息と癒しとくつろぎを求めがちです。教会員のお一人お一人も忙しい時や仕事で疲れた時には、まず休みたいと思うことでしょう。もちろん、それが悪いということではありません。しかし、まずはイエス様のように祈ることで魂の癒しと休息を経験したいと思わされます。イエス様の姿を見れば、祈る時間がないほど忙しいというのは、ある意味本末転倒のように思います。

イエス様が、このような時に祈って時間を過ごすということは、残念ながらシモンとその仲間たちにとっては、理解できないことであり、非現実的であり、完全に承認できないことだったのでしょう。ですから、わざわざイエス様の後を追って来て、彼を見つけて、「皆があなたを捜しています。」と報告したのです。それは、イエスがさらにこの地で、癒しをしたり、悪霊を追い出すようなみわざを続けてくださることを期待したからです。ですから、イエスが彼らの意に反して、「さあ、近くにある別の町や村へ行こう。」と言われた時には当惑したのではなかろうかと思えます。弟子たちの考えていたこととイエス様の思いとは全く異なっていたからです。イエス様は謙遜にみこころをうかがいながら、働きを進めていこうとされました。このイエス様の姿は、まさに私たちに対する信仰生活の手本となるべきものです。ですから、私たちも、謙遜に父なる神のみこころを常にうかがいながら、生活し、奉仕をし、日々のなすべき務めにあたるべきです。それとともに祈らなければ、弟子たちと同じように神のみこころとは全く異なる行動をしてしまったり、みこころではない考えを持ってしまいかねません。そのような信仰者にならないためにも祈りに励みましょう。